

学部留学生が抱えるノートテイキングの困難点

高 村 めぐみ

Abstract

This study was conducted based on two analyses in order to examine the difficulties faced by international undergraduate students when taking notes during lectures.

The first analysis investigated the impact of the following three factors on the quality and quantity of note-taking: (1) distributed lecture materials, (2) lecturer's utterance speed, and (3) quantity of text within lecture slides. The results indicated that the quantity and accuracy of note-taking can be increased by careful explanations through speech-based information in addition to text-based information, as well as by avoiding superfluous information on lecture slides.

The second analysis involved a semi-structured interview with two international undergraduate students regarding their methods and difficulties in note-taking. The results of the interview revealed that even if the students were diligently engaged in note-taking throughout the lecture, it was difficult for them to produce highly comprehensive notes. In addition, the students experienced problems in note-taking when lecturers spoke with an unfamiliar accent or wrote using small characters on the whiteboard.

The results of this study may contribute to the reconsideration of lecture slide preparation, lecture methods, and writing on whiteboards during classes.

Keywords: note-taking, international undergraduate students, semi-structured interview, lecture slide, writing on whiteboards

1. はじめに

日本の大学に在籍する学部留学生の中には、講師が話す一般教養科目、専門科目の講義の内容を正確、かつ瞬時に理解することに困難を感じている者がいる。日本語学校で教師が話す「わかりやすい日本語」とは違い、多くの講師が話す「自然な日本語」に慣れていないことが一因かもしれないが、講義内容、板書、資料の提示など他の要因も考えられる。

大学では、内容理解の補助教材としてパワーポイント等のスライドを使うことが多い。そのコピーを配布する講師も多い。その配布資料には、当然ながら全ての情報が含まれているわけではないため、講師が口頭で説明した内容をノートすることが大切である。だが、留学生の場合、日本語母語話者のように情報を正確に聞き取り、即座に要点を捉え、それを文字化するという活動ができるかという点、そこまでの日本語能力に達していない学生もいる。授業中に理解できなかった分、留学生は家で多くの時間を復習に割いているという声も聞くが、ノートテイキングが不十分なため、効果的な復習ができていない可能性がある。

岸他（2004）によると、ノートテイキングの量と授業後のテスト得点との間には、有意な相関があるという。授業中に行われるノートテイキングは、それ自体が目的ではなく、家で復習すること、最終的には試験でいい点をとることを目的に行われる行為であるが、岸の論を援用すれば、十分な量のノートテイキングは、大学で効果的に学習するためには欠かすことのできない行為であると言えよう。

では、学部留学生は、量・質とも復習に役立つノートテイキングができているのだろうか。できていない場合は、何が妨げになっていると考えているのだろうか。これらを明らかにするために、本研究では2つの調査を行った。まず、調査1では、①発表時の配布資料の有無、②発表者の発話とスライドが、ノートテイキングの量・質にどのような影響があるかを分析した。次に、調査2では学部生2名に対し、講義中のノートテイキングについて半構造化インタビューを行い、どのようにノートをとっているか、またノートテイキングをしにくいと感じる要因は何かを探った。これらの結果を踏まえ、発話者（講師）がどのような点に留意すると、聴取者（留学生）は学習に役立つノートがとれるようになるかを考える。

2. 調査1 ノートテイキングに影響を与える要因

2.1 資料

調査1では、2019年11月29日、12月6日、12月13日、12月20日、日本語科目の授業¹⁾、「スライドを使った留学生による発表」で採取した発表者の音声²⁾と聴取者のノートを資料に分析を行った。

A大学の学部2年生、計15名のクラスで、全員N1相当の日本語力を持っている。一般的に行われる調査発表同様、1人の学生が教室の前に立ち、スライドを使ってプレゼンテーションする形式である。学生が15人いるため、発表は15回行った。発話者1名と聴取者14名(=ノートテイカー)で、1回(90分)約4名、1人20分(発表10分程度、その後、数分間の質疑応答)の持ち時間で一回目～四回目までの計4回にわたり行った。音声収録は、発話者から約50センチ離れたところにICレコーダー(DM-750 Voice-Trek)を置いて録音した。

2.2 研究概要

①発表時の配布資料の有無がノートテイキングに差を及ぼすか、②発表者の発話とスライドによってノートテイキングに差を及ぼすか、2つの視点で分析を行った。

2.2.1 ①発表時の配布資料の有無によるノートテイキングの差

まず、配布資料がある場合とない場合では、ノートテイキングに差があるかを明らかにするため、一、二回目の発表と三、四回目の発表で配付する資料を変えて調査した。一、二回目は聴取者にスライドのコピーを渡さず白紙のみを渡し、ノートをとるように指示した。一方、三、四回目はA4サイズ用の紙1枚あたりに6枚のスライドが入った配布資料を渡し、ノートをするように指示した。その結果、一、二回目の白紙には多少の差はあるものの、14人全員が何かしらのノートをとっていた。一方、三回目の配布資料には、誰もノートをとっていなかった。「大切なことは全て配布資料に書かれているから、書き加える必要はない」というのが理由である。そこで、四回目では、配布資料に書き加えなくても良いので、大切な部分に線を引くよう指示をした。だが、線をひく学生はいなかった。「すでに大切な文字は赤になっていたり、大きく書いてあったりするから」というのが理由である。

今回の調査では、スライドのコピーを配布資料にした場合、学生はノートテイキングを行わないという結果になった。但し、後述する調査2のインタビューでは「配布資料に書き込むことが大切」と述べているため、スライドにある情報で十分と判断した場合、ノートをとらないのではないかと推測される。

以上の結果から、2.2.2、および2.3では一、二回目の発表で採取した音声とノートを資料に分析を行った。

2.2.2 ②発表者の発話、スライドがノートテイキングに与える影響

第一、二回目に行われた発表は計8件である。その中から聴取者のノートテイキングの量が一番少なかったA氏の発表と、ノートテイキングの量が一番多かったB氏の発表を資料に、A氏とB氏の音声、および各発表のときに書いた14名分のノートの相違点を分析した。発話者2名のプロフィールを表1に示す。

表1 聴取者がノートテイキングを行った発話者2名のプロフィール

	A氏	B氏
母語	中国	韓国
滞日期間	約1年	約3年
日本語能力	N1	N1
年齢	20代	20代

次に、各発表のスライドの構成を表2に示す。A氏は1. タイトル, 2. はじめに, 3. 調査の目的, 4. 調査方法, 5-1~5. 結果, 6. 考察, 7. まとめ, 8. 今後の課題, 9. 参考文献の計13枚で構成されている。一方、B氏は1. タイトル, 2. はじめに, 3. 調査の目的, 4-1. 調査方法, 4-2. 質問の内容, 5-1~3. 結果, 6. 考察, 7. まとめ, 8. 今後の課題, 9. 参考文献の計12枚である。両者はスライドの枚数、構成ともほぼ差がない。

表2 スライドの概要、構成

シート No.	A氏	B氏
1	1. タイトル	1. タイトル
2	2. はじめに	2. はじめに
3	3. 調査の目的	3. 調査の目的
4	4. 調査方法	4-1. 調査方法
5	5-1. 結果	4-2. 質問の内容
6	5-2. 結果	5-1. 結果
7	5-3. 結果	5-2. 結果
8	5-4. 結果	5-3. 結果
9	5-5. 結果	6. 考察
10	6. 考察	7. まとめ
11	7. まとめ	8. 今後の課題
12	8. 今後の課題	9. 参考文献
13	9. 参考文献	
	計13枚	計12枚

各発表者の発話とスライドの特徴を調べるために、1) 発表の総時間長, 2) 総拍数, 3) 発話速度³⁾, 4) スライド総枚数, 5) スライド1枚あたりの時間長平均, 6) スライド1枚あたりの拍数平均, 7) スライド1枚に書かれた文字数平均を出した⁴⁾。

その結果、1) 総時間長は、B氏(7分55秒)はA氏(6分07秒)より長い、2) 総拍数がB氏のほうが多かった(A氏=1415文字, B氏=2098文字)。また、3) 発話速度

はB氏のほうがゆっくりであった（A氏＝4.42拍／秒， B氏＝3.85拍／秒）。

スライドについては， 5）スライド1枚あたりの時間長平均（A氏＝28.2秒， B氏＝39.5秒）と6）スライド1枚あたりの拍数平均（A氏＝108拍， B氏＝174拍）を見ると， B氏はA氏より1枚あたりに長い時間をかけて丁寧に説明していることがわかる。また， 7）スライド1枚あたりの文字数平均はA氏のほうが多かった（A氏＝55文字， B氏＝36文字）。つまり， A氏のスライドは， 1枚あたりの文字情報量が多いが， 発話の時間長は短く， かつ速いスピードで話していた。一方， B氏の発表はスライド1枚あたりの情報量は少ないが， 口頭で時間をかけて丁寧に説明していたことがわかる。

表3 A氏とB氏の発表についての分析結果

	A氏	B氏
1) 総時間長	6分07秒	7分55秒
2) 総拍数	1415拍	2098拍
3) 発話速度	4.42拍／秒	3.85拍／秒
4) スライド総枚数	13枚	12枚
5) スライド1枚あたりの時間長平均	28.2秒	39.5秒
6) スライド1枚あたりの拍数平均	108拍	174拍
7) スライド1枚に書かれた文字数平均	55文字	36文字

2.3 聴取者のノートの分析

次に， 聴取者14名が書いたノートを分析した。主に， a）聴取者がどのスライドでどのようなノートを何回書いたか， b）スライドの文字情報を写す以外に他の情報をノートしていたか， c）ノートの内容は発表者の説明を正確に写しているか， の3点を分析した。

a）聴取者がどのスライドでどのようなノートを何回書いたかについて述べる。例えば， 聴取者X氏は「60%→はい， 40%→いいえ」というノートを書いていた。これは図1「5-1. 結果1」のスライドを見ながらノートしたものであると推測できる。この場合， このスライドの内容に関わる「はい 60%」， 「いいえ 40%」という部分にフォーカスしてノートをとったと見なし， それぞれ1回とカウントした。さらに， 13名の聴取者のノートを分析したところ， 「はい 60%」は4人， 「いいえ 40%」は5人の学生がノートをとっていたため， X氏と合計し， 表4のようにまとめた。全てのスライドを分析， 集計した結果は表5， 6に示す。

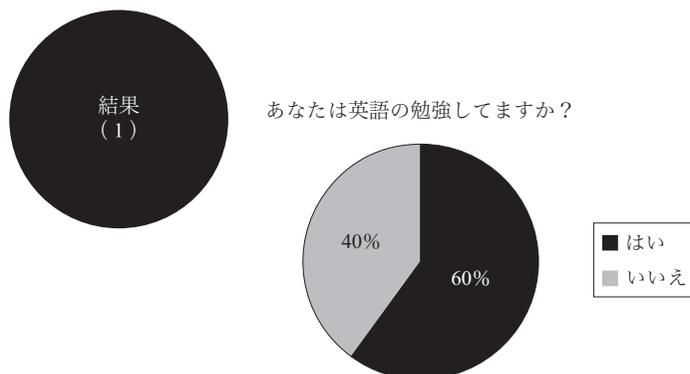


図1 B氏の「5-1：結果1」のスライド（一例）

表4 図1のスライドを見て書いた内容と回数

	内容	回数
5-1. 結果1	あなたは英語の勉強をしていますか	10
	はい 60%	5
	いいえ 40%	6

表5 A氏の発表で聴取者14人がノートテイキングを行った箇所

1	タイトル	男女の間に単純に深い友情がありますか	9
2	はじめに 動機と背景	中国で熱論を巻き起こす	2
		若者が関心	0
		5千人注目	0
		2万人目を通す	0
3	目的	若者は	1
		異性の友達がいる？	0
		男女の友情についてどう思う？	0
		友情と愛情の境界は何だと思う？	0
4	調査方法	日時 2019年9月	0
		場所 愛知大学キャンパス内	0
		対象 男性10名, 女性20名	0
		国 日本, 台湾, 中国	0
5-1	結果1	今回のアンケート調査	0
		女性20人	0
		男性10人	0
		仲が良い異性の友達がいる23人	2
		仲が良い異性の友達がない7人	0

学部留学生が抱えるノートテイキングの困難点

5-2	結果 2	異性の友達とどんな話題を話しますか	1
		91.3% 娯楽	9
		60.9% ニュースと部活	2
		56.6% 家族と学習	2
		4.4% 何でも話す	1
5-3	結果 3	同性の友達とは話すけど、異性の友達とは話さない 17人	0
		同性の友達とは話すことを異性の友達とも話す 6人	0
		同性の友達と話すけど異性の友達とは話さない話題は	3
		好きな人 47.1%	2
		自分の気持ち 35.3%	1
		健康状態 11.8%	0
		アイドル、メイク、ファッション、噂、家族 29.1%	0
5-4	結果 4	異性の友達が恋人になる可能性がありますか	1
		可能 7人	2
		不可能 11人	3
		わからない 7人	1
		恋人がいたら異性の友達と距離を保ちますか	1
		保つ 86.96%	1
保たない 13.04%	0		
5-5	結果 5	男女の間に単純に深い友情があると思いますか	2
		はい 73.3%	0
		いいえ 26.7%	0
		友情と愛情の境界はなんですか	3
		感覚 53.3%	3
		距離 33.3%	1
		わからない 23.3%	0
		ない 3.3%	1
その他 10%	0		
6	考察	男女の付き合いは普通のこと	4
		同性の友達と異性の友達は違う	1
		男女の間に単純に深い友情がある	2
		友情と愛情の境界は曖昧	1
7	まとめ、主張	異性の友達は不安定性	6
		愛情と友情、愛情は特別な友情	7
8	今後の課題	性別に関係ない友情にもっと深く理解する	0
		異性の友情に対して男女の考えが違いますか？	0
9	参考文献		0

表6 B氏の発表で聴取者14人がノートテイキングを行った箇所

1	タイトル		11
2	はじめに	アジア圏の英語教育が高まっている	7
		いろんな言語でなぜ英語なのか？	3
3	調査の目的	非英語圏の人々の英語に対する意識調査	3
		色んな言語でなぜ英語なのか？	0
4-1	調査方法	調査対象：非英語圏人々	3
		調査場所：校舎内，アルバイト先	0
4-2	質問の内容	あなたは今，英語の勉強をしていますか？	0
		もし実生活（学校，職場）で英語しか使ってはいけない状況になったらどう思いますか？	0
		これからも英語は必ず学ぶ価値がある言語だと思いますか？	0
5-1	結果 1	あなたは英語の勉強をしていますか	10
		答：60%	5
		答：40%	6
5-2	結果 2	実生活での英語使用	4
		答：33%	4
		答：67%	4
5-3	結果 3	未来でも英語は価値のある言語なのか	4
		答：89%	4
		答：11%	4
6	考察	今後も英語教育の重要性は高い	4
		英語を話すのは苦手な環境でこれからも活用できるか疑問	1
		コミュニケーションができる言語の方が学ぶべきではないか	0
7	まとめ	勉強の目的 ひとそれぞれ	1
		実生活の使用は67%が否定的	1
		89%の人は今後も学ぶ価値がある	0
8	今後の課題	もしあなたの子供に母語と英語で何を中心に勉強させますか	0
		A) 既婚者男女に質問	0
		B) 未婚者男女に質問	0
9	参考文献		0

次に、b) スライドの文字情報を写す以外に他の情報をノートしていたかについて述べる。A氏の発表では、スライドの文字以外ノートをとっている聴取者はいなかったが、B氏の発表では、「5-1. 結果 1」で、現在、英語の勉強をしている理由について説明をしている際、スライドに書かれていない情報をノートしたものが8件あった。他に、「6. 考察」、 「7. まとめ」では、聴取者自身が自分でまとめたメモが1件、発話者への質問のメモが3件あった。

表7 スライドの文字情報以外のノートテイキングの回数 (B氏の発表)

スライド	回数
5-1. 結果1	8
6. 考察+7. まとめ	1
その他 (発表者に質問したいこと)	3

最後に、c) ノートの内容は発表者の説明を正確に写しているかについて述べる。A氏の発表では、「1. タイトル」のスライドを提示しているとき、スクリーンには「男女の間に単純な友情がありますか。」と表示されたが、ノートには「単純な関係」と書かれた誤りがあった。また、「5-2. 結果2」で、異性の友達とどんな話題で話をするかについて説明をしている際、スクリーンには「91.3% 娯楽」と表示されたが、ノートには「93%」と書かれた誤り、「5. 結果5」で、男女の間に単純に深い友情があると考えているかについて説明をしている際、スクリーンには「ある70.33%」と表示されたが、ノートには「80%以上」と書かれた誤りが3件あった。一方、B氏の発表では、スクリーンに映された文字の書き誤りはなかったが、「5-1. 結果1」のスライドで、英語を勉強する理由を説明している際、B氏は言語に興味があるかが結果に関係すると口頭で説明をしたが、聴取者のノートには「外国に行きたい」と書かれた誤りが1件あった。

表8 発表内容と異なるノートテイキング (A氏)

A氏		正	誤
1. タイトル	スライド	男女の間に単純な友情がありますか	単純な関係
5-2. 結果	スライド	91.3%	93%
結果5	スライド	70.33%	80%以上

表9 発表内容と異なるノートテイキング (B氏)

B氏		正	誤
1. タイトル	口頭	言語に興味がある	外国に行きたい

2.4 考察

以上の結果を踏まえて、発表者の発話とスライドがノートテイキングの量と質にどのような影響があるかを考察する。

まず、前述したように、A氏の発表は、スライドの情報量が多く、短い時間で次のスライドに移行してしまうため、b)スライドの文字情報を写す以外、他の情報はノートできなかったのではないかと推測する。一方、B氏の発表は、1枚のスライドに書かれた情報量は多くないが、それ以外の情報を口頭でゆっくり時間をかけて伝えていたため、耳から得た情

報もノートをとる余裕があったものと推測できる。

では、これらがc) ノートテイキングの内容は発表者の説明を正確に写すことに影響を与えるのだろうか。一見、スライドにある文字を書き写すだけのため、耳から得た情報を書くより、誤りは少ないように思われる。だが、今回の結果からは、むしろ耳から多くの情報をインプットする余裕があるB氏の発表のほうが、ノートの誤りが少ないという結果になった(誤りの数：A氏=3件、B氏=1件：表8, 9)。このことから、正確なノートテイキングを促すため、発話者は「文字の少ないスライド」を、「丁寧に時間をかけて説明する」と効果的であることが示唆されたと言えよう。

また、今回のような構成の場合、「結果」の部分を丁寧に説明すると、書き込みが多くなるという結果になった。それは、A氏の発表では「まとめ、考察」の部分、B氏の発表では「結果」の部分でノートを多くとっていることから推測できる(表5, 6)。調査発表の場合、「結果」や「まとめ」の部分に大切な内容を説明することが多いが、ノートテイキングの回数を見ると、聴取者たちはそのことを理解した上でノートをとっていたと考えられる。

3. 調査2 学習者が感じるノートテイキングのときの困難点

調査1では、発表時の配布資料、発話、スライドがノートテイキングの量・質にどのような影響を及ぼすか分析した。だが、調査1だけでは、留学生がノートテイキングのときに感じている困難点や意識についてまでは分析ができない。そこで、調査2では学部留学生2名を対象に、授業中どのような方法でノートをとっていて、何が困難だと感じているかを明らかにすることを目的にインタビュー調査を行った。

3.1 インタビューの概要

2022年1月15日、A大学の学部留学生であるY氏(文系大学の学部4年生、中国出身、男性)とZ氏(文系大学の学部4年生、台湾出身、女性)の2名に半構造化インタビューを行った。この2名は大学1年生のときからの友人同士である。また、筆者も両名のことをよく知っており、3人は旧知の間柄である。

Y氏、Z氏とも日本語学校時代を合わせると約6年滞日している。日本語能力検定試験N1に合格しており、大学での成績は極めて優秀で、大変熱心に勉学に励んでいる。インタビューの時点で既に卒論提出を含め、すべての授業が終了していたため、大学4年間に行ったノートテイキングを振り返りながらインタビューに答えてもらった。新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、インタビューはY氏、Z氏、筆者の3名がzoomに入室して行った。事前に用意した質問は以下の通りである。

1. プロフィール
2. 家では具体的にどのようにして学習をしているか。
 - ・家で学習するときどのようにノートを使っているか。
 - ・授業中に行ったノートテイキングでは足りないことがあるか。
3. 授業中のノートテイキングについて
 - ・具体的にどのようにノートをとっているか。
 - ・教師が配布する資料（レジメやスライドのコピー）は役に立っているか。
 - ・配布資料に直接書き込んでいるか。
 - ・配布資料がない授業ではどうしているか。
 - ・ノートをとるときの言語は母語か、日本語か。
4. ノートがとりやすくなる／とりにくくなる要因
 - ・ノートをとっていて困難に感じることはあるか。
 - ・どんな配布資料がノートテイキングに都合が良いか。

あらかじめ質問の順番を決めてはいたが、Z氏、Y氏の発話を順番が予想とは違っても、軌道修正することなしに自由に話をしてもらう形でインタビューを進めた。面識のある人間同士の会話だったため、緊張している様子はなかった。また、Y氏とZ氏の発話量は同程度だった。

3.2 研究方法

インタビューは合計55分であった。録音を文字起こし⁵⁾したのち、調査2の目的である1. 授業中どのような方法でノートをとっているか、2. 何が困難だと感じているかの2つに関する発話を抽出した。それをKJ法におけるグループ分けの手法を用いて分類した。その結果、①家で復習するときのノートの活用法、②授業中のノートテイキングの方法、③配布資料とノートテイキングの関係、④ノートテイキングを妨げる／促進する要因の4つに分類ができた。

3.2.1 ①家で復習するときのノートの活用法

1. はじめにで述べたように、学習者がノートをとるのはそれ自体が目的ではなく、復習のためである。ここでは、家でどのように復習しているかについて聞いた⁶⁾。

まず、Y氏の家での学習方法について述べる。Y氏は「(Y9) 例えば、〇〇学部に乗るといって授業がありまして、その先生は主にパワポで講義をしてるんですが、最終的に復習に関しては、今までのパワポに出てきたポイントをテスト範囲として出されるということになってまして。なので、復習に関してはやっぱり授業中にパワポを写し込んで、後でこうやってノートに（自作ノートをカメラに向けながら）。……こういう感じにまとめて。」と述べてい

る。授業中は、配付されたレジュメに大切なことを書き込んでいるが、それだけでは不十分なので、家に帰ってからもう一度すべてノートを書き直しており、専門用語やわからない言葉に中国語訳をつけた「自作ノート」を作っているという。それは、期末試験の対策でもあると考えている。「(Y80) 試験は持ち込み可の授業があつて。普段の授業ではレジュメを配ったりしてるんですけど、最終的に持ち込み可は自作ノートのみという。そういう場合だと全部ノートにまとめなきゃいけない」ため、試験対策としても自作ノートは非常に有効な学習方法だと考えていることが窺える。

一方、Z氏は家での復習は主に配付されたレジュメを使っているという。家では、「(Z15) レジュメを見ながらポイントとか、そういう重要なところ」を見つけたら、再度レジュメを読み直し、わかりにくい点や不足分について新たに書き込みをして、自分にとってわかりやすいレジュメを完成させているという。

以上のことから、Y氏、Z氏ともに、家では、授業中に説明された内容を確認しながら、時間がたっても思い出せるような自作ノート、あるいはレジュメを完成させる作業に時間を費やしていると考えられる。そのため、Y氏、Z氏ともに、「家での復習のために、授業中のノートテイキングは非常に大切だ」と言っている。

3.2.2 ②授業中のノートテイキングの方法

では、具体的にどのようにノートをとっているのだろうか。

まず、レジュメの配布がある授業では、Y氏は「(Y10) とりあえず授業中はそれ(レジュメ)を見て、大切なことをちょっと書き込んでいる」。Z氏も「聞いたことをまとめて書く」作業を行っている。

レジュメの配布がない授業では、Y氏は「(Y45) レジュメがなくても写真OKな先生であれば、(スライドの) 写真を撮っています。でもOKじゃないと、やっぱり急いで(ノートをとる)しかない。あと、板書を写す」ことに集中しているという。

Z氏も、「(Z16) (レジュメがない場合も) とりあえず重要なところをノートして、スライド変わったら、また次のスライドのポイントを急いで書く」という活動を続けており、二人とも教師のことばをひたすらノートや配布資料に書き込んでいるという。自分の言葉でまとめて書き込むこともあるが、「(Y93) やっぱ留学生にとって要点をまとめるのが、長い文章の中で1つの要点だけまとめるっていうことがちょっと難しいというのがある」ため、授業中は基本的に耳から入ってきた言葉をそのまま書いている。また、「(Y94) (シンプルレジュメをくれる授業の場合) 先生によっては、そこで『要点の文章のところに付け加えたほうがいいですよ』って、そういう感じで板書し始める」ため、その場合は必ずレジュメに書き加えている。それでも、留学生にとってノートテイキングは時間がかかる作業のため、十分なノートをとれないことがあるという。そのような場合は「(Z35) やっぱ足りないなと思っ

たときは、日本人の友達を頼る」という人的リソースを用いて対応していることが窺える。

3.2.3 ③配布資料とノートテイキングの関係

調査1「2.2.1①発表時の配布資料によるノートテイキングの差」では、スライドのコピーを渡した場合、学生はノートをとらなかった。それは、配布資料に十分な情報が含まれているから、という理由である。つまり、耳から入った情報を要約し、その場で文字化するのが難しい留学生にとっては、多くの情報が詰め込まれた配布資料をもらったほうが学習しやすいのだろうか。あるいは、情報量の少ないシンプルな配布資料であっても、1枚のスライドに時間をかけて説明すれば、耳からの情報を文字化することができるのだろうか。

Z氏は「(Z96) プリントとかレジユメを配っても、見ても読んでも意味がわからないときもあります。先生の説明を聞かないと、ほんとに何が言ってるのがわからなくて、そういう授業もあります。まとめ過ぎちゃってるっていうか、簡単に書き過ぎちゃったっていうか。あとは写真だけとか」だと、レジユメだけを後で見ても授業の内容が思い出されないため、ノートテイキングが必須であると言っている。

それに対してY氏は、「(Y102) 多分、それ(=要点のみを書いたシンプルなレジユメの配布)は、先生たちが学生たちにノートをとらせたいという意図」があり、「(Y102) 全部レジユメにまとまっていたら、先生の話を書かないですよ」と言っている。つまり、シンプルなレジユメを渡されることにマイナスの評価をしておらず、基本的に「授業中に学生がノートをとること」によって「復習に役立つレジユメが完成する」とY氏は理解している。

つまり、留学生のノートテイキングの負担を減らすために、授業内容を詳細に記したレジユメを配布したほうが良いと考えているのかというと、そうとも言い切れない。「(Z41) 私はノート書くほうなので、やはり自分で書かないと不安です。レジユメだけ見るのは不安なんで。他の学生はどう思っているかはわからないけど」と言っている。また、「(Z75) スライドで赤字にしたところでも、モノクロのレジユメにすると全然わからないじゃないですか。だから、あそこに、ここ赤いですとか、ここ重要ですよって、まずスライドと一緒にする。そして、それに加えて先生が何か話したらまた他のノートに補足します」と述べている。さらに「(Z104) (どんなレジユメかに関係なく) ノートをとる学生はノートをとります。ノートをとらない人はノートをとらない」とも述べている。

Y氏も、「(Y103) 綺麗にまとまったレジユメを先生が渡したら、ノートをとらずにそれだけあればいいっていう生徒もいるかもしれない。でも僕はどんなレジユメか関係なくノートをとる」という。つまり、レジユメの完成度に関わりなく、些細な情報でも書き留めたいから、授業中は手を動かさずと言っている。さらに、カラーの資料でないときは自分のレジユメに色を付け、重要なポイントを区別する作業も必要であるため、レジユメの情報量が学習者のノートテイキングの量に影響を及ぼすことはないと考えていることが窺える。

なお、ノートテイキングのときの使用言語はノートの量や質に影響がないと考える。Z氏は、「(Z26) 中国語では何の意味とか、たまに日本語でも自分でわかるようにメモ」していると言っている。メモに使う言語は「(Z87) 私にとって台湾の漢字のほうが難しいので、たまに日本語の漢字とか中国語の漢字とかで。もちろんたまに台湾の漢字とか」と、特に決まった言語を使っているわけではないと述べている。これは「(Z89) 後で自分がわかれば良いから」である。Y氏も「(自作ノートをカメラに映しながら、ノートをとるときに使う言語は) 特に決まっていない」と述べており、使用言語がノートテイキングに与える影響は特にないものと推測できる。

3.2.4 ④ノートテイキングを妨げる／促進する要因

最後に、ノートテイキングを妨げる／促進する要因についてまとめる。

ノートをとっているときに困ることは、主に1. 教師の発話中にわからないことば、表現がある、2. 板書が読みにくい、の2点である。

まず、「1. 教師の発話が理解できないこと」については、「(Y3) やはり日本語学校では先生が易しい日本語、いわゆる標準語で話してくださいということになっていましたが、大学に入ると話し方に癖がついてる先生とかが、そういう先生に関しては、ちょっと最初は苦手でした。」(Y7) やっぱりアクセントは地域によって違うじゃないですか。アクセントの言い方によってもそういうわかりづらいところもかなりあったりしてます。」が「(Y3) でも、自分が慣れていくと、だんだん慣れてくるという感じで。」と述べている。Z氏も「(Z4) 私はめちゃ方言が苦手」なので「(Z5) たまにわからないところもあった」という。これらの発言から、自分が慣れていない方言がわからず、初めのうちは戸惑っていたが、回数を重ねるうちに慣れていった様子が窺える。筆者は専門用語など難しい語彙がわからないことに難儀してのではないかと予測をしていたが、意外と専門用語がわからずに困ることはないようである。それは、日本人の大学生にとっても初見の用語である場合、教師が丁寧に説明をしてくれること、また、講義で話している日本語がわからないときは「(Z26) 授業中の時間があるときに辞書で調べる」ことができるからではないかと推測する。

次に「2. 板書」についてである。まず、「(Y65) 板書の書き方に癖のある先生は、時々何を書いてるかわかんない」ことがあるという。また、「(Z67) (レジュメの順番と) 板書の順番が違ふとからわからない」こともあるという。さらに、「(Y48) 黒板にたくさん板書しているんですが、先生の字がちっちゃいんです。ちょうど多人数の授業で300人とか200人とかのやつで、ずっとというか、(座席指定で) 後ろのほうに座っていると見えないんです」(Z49) 指定席でほんとにちょうど、大きな教室で2段目の一番前、ちょうど。上のモニターも見えない、前も見えないという状況で。でも指定席なので移動できない。先生の板書が見えなくて」というように、板書の文字の大きさに困った経験があると述べている。その

場合は、2人とも「(Y, Z) 後で友達に聞く」ことができる場合は聞けるが、出来ない場合は諦めるという。

最後に、ノートがとりやすいのはどのような授業、レジュメかという質問をしたが、特に回答を得ることはできなかった。学生にとって、「ノートテイキング」はとりやすいか、とりにくいかを考える余地があるものではなく、教師の授業スタイルに合わせて行わなければならない作業だと考えていることがわかる。

4. まとめ

以上、本研究の結果と考察をまとめる。まず、調査1では、①発表時の配布資料の有無がノートテイキングに影響を与えるかを調べた。その結果、内容がよくわかる資料がある場合、積極的にノートをとらないということがわかった。次に、②発話者の発話とスライドがノートテイキングにどのような影響をあたえるかを調べた。その結果、量・質の高いノートをとるには、

1. 1枚のスライドに多くの情報を詰め込みすぎない
2. その上で、耳からも情報を与える
3. その際、1枚のスライドにかける時間を長くし、丁寧に説明する

の3点が必要であることが示唆された。

調査2では、学部留学生2名を対象に、授業中、どのような方法でノートをとっていて、何が困難だと感じているかを明らかにするために、半構造化インタビューを行った。その結果をKJ法におけるグループ分けの手法を用いて分類したところ、①家で復習するときのノートの活用法、②授業中のノートテイキングの方法、③配布資料とノートテイキングの関係、④ノートテイキングを妨げる／促進する要因の4つに分類できた。それぞれに関する発話を分析したところ、①家で復習するときのノートの活用法、②授業中のノートテイキングの方法については、留学生にとって授業時間内に完成度の高いノートを作るのは難しく、そのため家での復習のとき「自作ノート」を作成する、あるいは、レジュメにコメントを書き加えるなどの方法で学習していることがわかった。③配布資料とノートテイキングの関係については、どのような配布資料であっても、授業中は耳と目から得た情報をひたすらノートをとるべきだと考えていることがわかった。最後に、④ノートテイキングを妨げる／促進する要因については、自分の聞きなれない方言や、板書の文字が小さいことがノートテイキングを妨げる要因になると感じていることが明らかになった。

以上2つの調査結果から、講義、発表の際、

1. 文字情報が多すぎないスライドのコピーを配布する

2. スライドの文字情報のみならず、耳からの情報も時間をかけて与える
3. 大きく読みやすい字で板書をする

という3点に留意すると、留学生はノートがとりやすくなることが示唆された。留学生を対象に講義や説明をするときは、これらのことに注意したい。

最後に、今後の課題を述べる。今回の研究では、調査1の発話者に留学生の発表を選んだが、これが一般教養科目、専門科目の講義のときにも同様の結果になるのだろうか。今後は資料を日本語母語話者にして調査を行いたい。また、配布資料のみで学習する場合とノートを自筆で書き加えた場合とでは、学習効果が異なるのかも調査する必要があると考える。

注

- 1) この授業は、「1. 関心のある身近なテーマについて考えを深め、適切な表現を使ってまとめることができる。2. アンケート調査、またはインタビュー調査を行い、図表を使って結果をまとめ、口頭で発表することができる。3. 総合的な日本語運用能力を身につける」の3つを目的に行っている。具体的には、「アンケート調査、またはインタビュー調査を通して、論理的で説得力のあるプレゼンテーションを行う技術を身につける」ための活動を行っている。学期の最後には、留学生自身が実施したアンケートやインタビューの結果をまとめて、クラスメートの前で発表をしている。
- 2) 今回、留学生の発表音声を資料にしたのは、内容、構成、発話時間等の統制を取るためである。
- 3) 発話部分とポーズの時間を合わせて計算した速さ (speech rate) である。「拍または音節/秒」で表されることが多いが、本研究では「文字 (ひらがな) /秒」を単位としている。なお、拗音、促音も1文字にカウントしている。
- 4) 1) 発表に要した持続時間長、2) 発表した音声の文字起こしをし、拍単位で数えた値、3) 注1参照、4) 2.2資料参照 (A氏=12枚、B氏=13枚)、5) スライド1枚にかかる持続時間長の平均値、6) スライド1枚を説明するのに必要とされる発話量の平均値、7) スライド1枚あたりに書かれている文字情報 (漢字かな交じり文) の量の平均値を示す。
- 5) 留学生の発話には、ところどころに誤りもみられたが、なるべく原文に近いまま記した。
- 6) インタビューの回答の中で、学習者がどのようにノートテイキングを行っているか、ノートテイキングという活動をどう考えているかが明確にわかると筆者が考える箇所に下線を引いた。

文献

- 岸俊行・塚田裕恵・野嶋栄一郎 (2004) 「ノートテイキングの有無と事後テストの得点との関連分析」『日本教育工学会論文誌』28, 265-268.
- 田中博晃 (2010) 「KJ法入門——質的データ分析法としてKJ法を行う前に」『より良い外国語教育研究のための方法 (外国語メディア学会 LET 関西支部メソドロジー研究部会2010年度報告論集)』17-29.